

山崎郷土叢

No. 81

5. 4. 25

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62-2000

三重県鳥羽市神島

八代神社の鏡について

片山昭悟

はじめに

三重県鳥羽市にある神島は、三島由紀夫の小説『潮騒』の島として有名であり、伊勢湾にある周囲が約四キロの小さな島である。この神島の八代神社には御神宝として、六十六面にもおよぶ多くの鏡が秘蔵されている。

古墳時代の鏡、画文帯神獸鏡があり、とくに奈良時代の鏡、そして平安時代・室町時代の鏡まで多くの鏡が伝世されている。これらは伊勢神島祭祀遺物として昭和五十八年に国の重要文化財に指定されている。

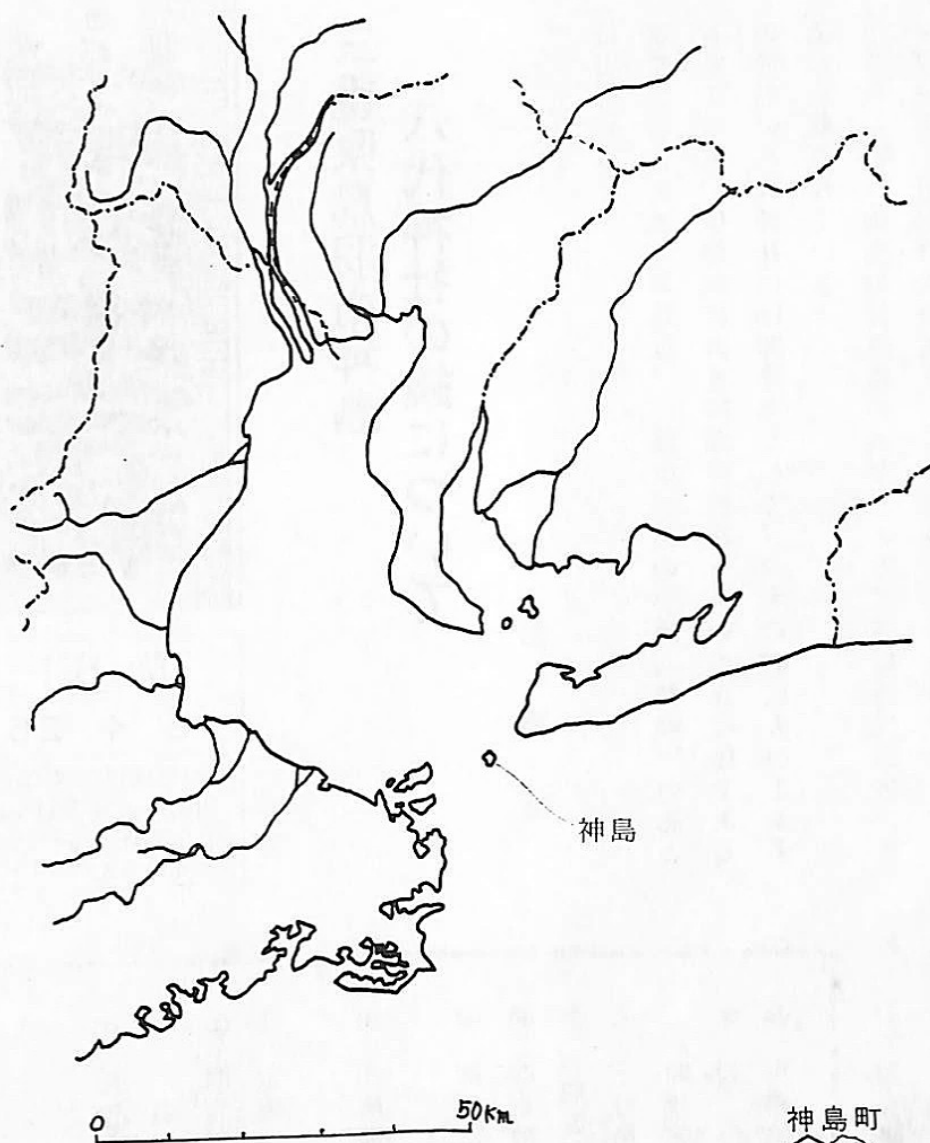
今回、八代神社の鏡について概略を紹介するが、山崎町金谷一号墳出土の奈良時代の鏡である瑞雲双鸞八花鏡(東京国立博物館蔵)

目次

①	三重県鳥羽市神島八代神社の鏡について	片山昭悟	1
②	明治維新の話 (3)	堀口春夫	8
③	定書一札ほか二(尼崎藩領庄屋文書)	久保寅夫	14
④	山崎藩と安志藩の二、三の関わりについて	野中龍二	17
⑤	秋の旅行記	岸本正理	20
⑥	闇斎神社に楷の木植樹		21
⑦	「瑞雲双鸞八花鏡」を出版	会報部	22
⑧	下町巖石神社の夫婦ヒノキが		
⑨	町指定天然記念物に	会報部	22
⑩	役員名簿		23
	事務局だより		25

について調査研究していると、奈良時代の鏡を考える上でとくに、私が昨年二月に訪れた九州宮崎県東臼杵郡南郷村神門神社の鏡とともに重要であり、古墳時代の鏡はじめ奈良時代・平安時代など多量に伝世されている神宝についてまとめてみた。

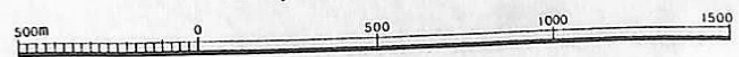
なお、八代神社の鏡を中心にして平成四年八月二十二日に観覧させていただきます。



三重県鳥羽市
神島 位置図

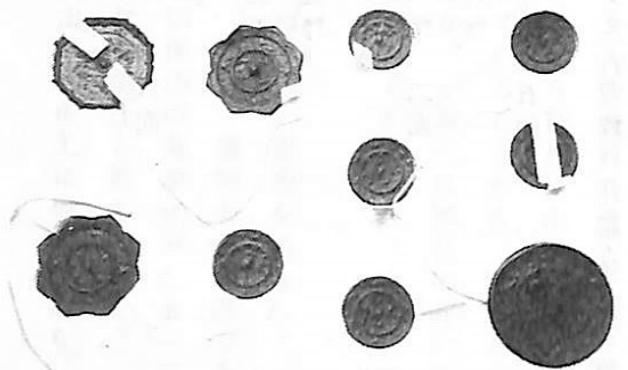


1:25,000 答 志





八代神社の鏡 古墳時代・奈良時代の鏡



八代神社の鏡 奈良時代の鏡



古墳時代の鏡
画文帯神獸鏡(八代神社蔵)

沢一〇九号墳、三重県
神前山古墳などから出
土し、全国で二十数例
あまりが知られている。
この鏡は『画文帯同
向式神獸鏡』といって
主文区の各像の配置が
一方向からみるように
してあり、四乳を中心
に蟠龍形の獸文を上下
それぞれ二体ずつ配し
ている。

八代神社の鏡について
三重県鳥羽市神島にある八代神社には、御神宝として秘蔵され
ている。
大別して次のようになる。

- 一・古墳時代関係
- 二・唐鏡
- 三・和鏡
- 四・経塚遺物
- 五・陶磁器
- 六・その他

古墳時代の鏡・奈良時代の鏡を中心にしてあり、古墳時代の画
文帯神獸鏡・金銅製頭椎大刀、奈良時代の伯牙弹琴鏡・花卉双蝶
八花鏡・狻猊双鸞鏡・狻猊双鸞八花鏡・唐草飛禽八稜鏡、そして
海獸葡萄鏡・素文鏡など。

鏡のほかに注目されるものには、奈良時代の緑釉陶器・青銅製
棊・櫛・金銅製の経筒などの経塚遺物、室町時代の懸仏など貴重
な祭祀遺物がみられる。

八代神社に伝世されている多くの神宝の中でも代表的なものに
古墳時代の鏡画文帯神獸鏡が知られる。

樋口隆康氏の『古鏡』によると熊本県江田船山古墳、奈良県新

八代神社の奈良時代の鏡

- 一・海獸葡萄鏡 径一〇・八^サ
- 二・海獸葡萄鏡 径六^サ 六面
- 三・伯牙弹琴鏡 径一七^サ
- 四・花卉双蝶八花鏡 径七・二五^サ
- 五・狻猊双鸞八花鏡 径九・五^サ
- 六・狻猊双鸞鏡 径一〇・二^サ
- 七・唐草飛禽八稜鏡 径九・一^サ 二面
- 八・狻猊双鸞鏡 径六・六^サ
- 九・素文鏡 径四・五^サ 五面

奈良時代の鏡には、伯牙弹琴鏡・花卉双蝶八花鏡・狻猊双鸞鏡・狻猊双鸞八花鏡・海獸葡萄鏡・小型海獸葡萄鏡・素文鏡など、これらの鏡はそれぞれ全国に多くの同型鏡が出土したり、伝世している。



奈良時代の鏡
花卉双蝶八花鏡(八代神社蔵)

とくに八代神社の鏡は、九州神門神社の鏡と伯牙弹琴鏡・狻猊双鸞鏡・海獸葡萄鏡・小型海獸葡萄鏡などが同型鏡である。

狻猊双鸞八花鏡は日光男体山山頂出土鏡と同型鏡で、このほか金銅製頭椎大刀、金銅製の経筒などの経塚遺物、奈良三彩の小壺など貴重な祭祀遺物がみられることから今回あらためて注目した。

八代神社鏡の研究史

奈良時代の鏡について同型鏡を調査していると必ず神島八代神社鏡が参考文献として紹介されている。

そして、多くの研究者によって八代神社の鏡が紹介されている。これらについて説明すると、古くは広瀬都巽氏が『和鏡聚英』

に、梅原末治氏は「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」、「近時所見の本邦での唐式鏡・志摩神島八代神社の遺品其他」、大西源一氏が「志摩神島八代神社の古神宝」、矢島恭介氏が「志摩神島八代神社の鏡」、また、岡崎讓治氏が「神門神社鏡とその同文様鏡について」澄田正一氏が「伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について」そして、亀井正道氏が「志摩神島八代神社神宝の意義」を、また「志摩神島八代神社の唐草飛禽八稜鏡」、中野政樹氏が「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその铸造技術」に紹介されている。

八代神社の鏡は昭和二十九年に伊勢神宮徴古館に出陳されたことが一度だけであり、また、八代神社については、中日新聞社によって昭和三十三年に「伊勢湾周辺総合学術調査」が行われている。

私は神島八代神社鏡にとくに興味をもったのは、梅原末治氏が「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」に伊勢國桑名郡多度村山の神社鏡について紹介されているが、これについて伊東富太郎氏の手拓本によるもので「播磨國宍粟郡城下村大字金谷で見出された鏡と全く同様なもの」と金谷鏡についても載せられている。そして、志摩國志摩郡神島八代神社所蔵の諸鏡についても伊東氏の手拓本によるもので、画文帯神獸鏡、金銅の刀装具、唐式の甕器、伯牙弹琴鏡などもみられる。

そして、梅原末治氏は八代神社の鏡を見られ、「近時所見の本邦での唐式鏡」に「神島から掘出されたと伝えるものがあるが、上古の遺品が後に伝世したものと考えられ、別には等と共に同じ時代の陶器・土器の類も存し、また、上古の各種の遺品も見受けられるところから島の各地で出土したものを神社に奉納して、それが伝えられたと解せられる」とされていることから、鏡がどのような経過で八代神社に伝世されたのか、一説には神社に近い島の北端の海岸から採集されたものと伝えなどがあるが、さだかではない。

私はこれらについても解明できればと思ひ現地を訪れた。

神島の地形はカルスト地形であり、また、急斜面の地形である。古墳の立地条件などを考えると、島の南西の海岸にあたる「古里の浜」の尾根上の先端に存在していた可能性も考えられる。

ただ、経塚遺物などをみると灯明山の尾根上に磐座があり、それらに関連するものではないか。

鳥羽市神島について

鳥羽市神島は伊勢湾の鳥羽から伊良湖岬にかけて東海地方へちょうど中間地点に位置する海上交通の重要な地点であったものと考えられる。

神島は古くから知られ、万葉集にも歌われ伊良湖の「渡合」と呼ばれる難所であったもので、とくに神島の中服に鎮座する八代神社には、祭神は綿津見命を祭ることから海上航行者の信仰が厚く、また、神の依りつく島として信仰の対象にされていたのであろう。

市営定期船で鳥羽佐田浜港から約一時間で神島港に到着する。

船からは伊良湖岬がすぐそこに見える。神島と伊良湖岬との間是非常に波も荒い。

この島は「伊勢八丈」ともいわれる。おそらく古代より東国への海上交通を祈願するために鏡を奉納したもののか。

奈良時代の海上祭祀として代表的な島は福岡県沖ノ島、岡山県笠岡市大飛島、石川県輪島舳倉島などが知られる。

八代神社の鏡見たまま

鳥羽市佐田浜港を午前九時五十分発の市営定期船に乗った一路目的地の神島へ。途中海女の島として知られる菅島に立ち寄った。菅島に近づくとつれ、神島がちょうど三角形のようにはっきりとみえた。

神島でもっとも高い標高一七〇mの灯明山の山頂には雲がかかり、

ちやうど神の島を思わせるようであった。

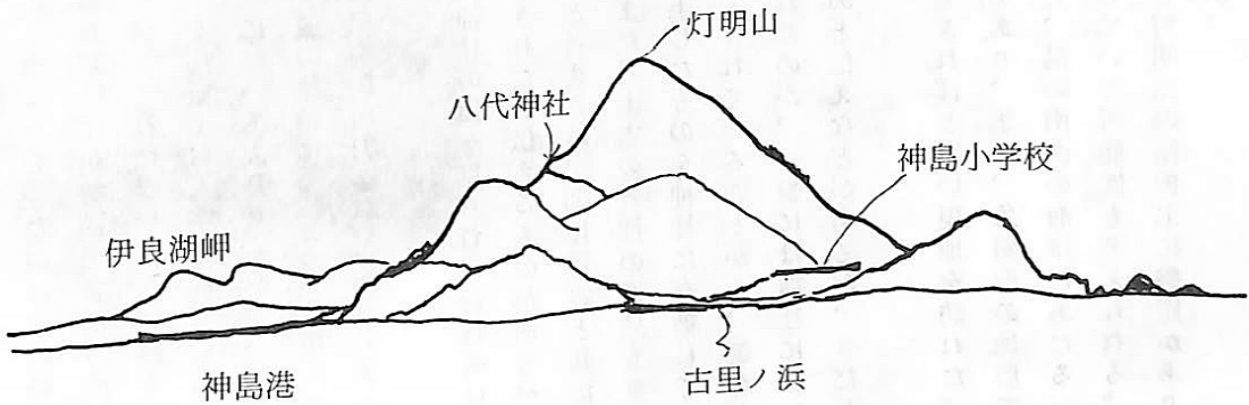
まさに神話の世界であった。

比較のおだやかな波であり、魚つりの小舟や大型タンカー、それに鳥羽から伊良湖岬への伊勢湾フェリーなどがみられた。

神島に次第に近づくと、つれ伊良湖岬と神島と並んですぐ近くに見える。

かつては地続きであったものと思われる。市営定期船は小型船であるが、八月二十二日は、わりと大勢の人々で賑わい、島へ帰る人など、会話にも島の風情が感じられた。そして神島港には午前

十時五十分に着いた。鳥羽市役所神島出張所では橋本達夫氏にお世話



鳥羽から神島遠景 (4.8.23, 8時45分ごろスケッチ)

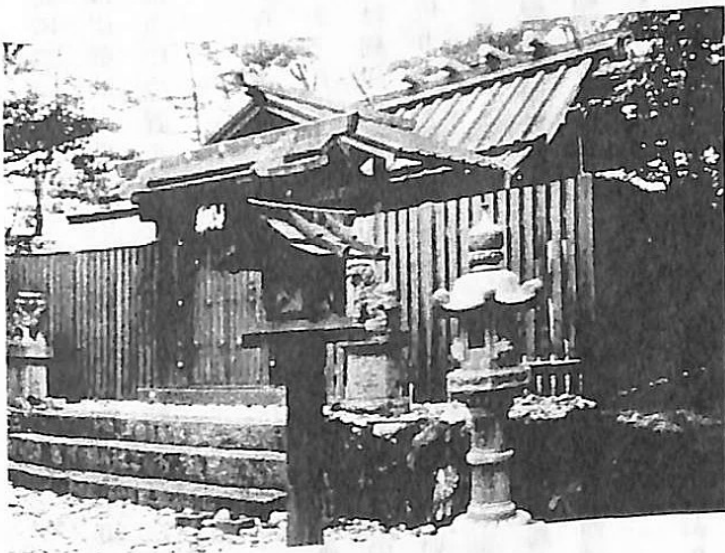
になり神島や八代神社鏡についてくわしくご教示いただいた。

そして、八代神社に案内していただき八代神社宮司の寺田秀雄氏宅へ伺い、続いて細い急な石段を登って行くと八代神社の社務所にいたる。

社務所の下に見晴らしの非常によい所に鏡が保管されている宝物館がある。

社務所の前には鳥居があり、二百段からある急な石段を登ると灯明山の中腹のところに八代神社の神明社造りの社殿がある。

この八代神社は西の伊勢神宮の方向を向いて建てられている。



八代神社 社殿

ちょうど午前十一時三十分頃、社務所に着く。社務所では氏子総代の前田氏・藤原氏が立ち会われ大変お世話になった。

寺田宮司より神島と八代神社の謂れについてご教示いただいた。八代神社は東海への海上交通の安全祈願に祭られているものとされ、鏡の拓本の掛け軸、保存処理前の鏡の写真、保存処理後の鏡の写真、これまで調査に来られた先生方のサイン帳などを見せていただいた。

奈良国立文化財研究所・奈良大学・神宮徴古館、その中には京都帝国大学の梅原末治先生の手紙があり、唐式鏡を研究する上で非常に感銘した。

午後一時になり宝物館に保管されている鏡についていよいよ見せていただくことになった。

一面一面鏡の写真撮影をしていたが、一つひとつピントを合わせし心をこめて祈るような気持ちでカメラのシャッターを押した。この気持ちは、これまでの多くの貴重な鏡を見せていただくたびに思う。

多くの神宝を午後三時三十分頃まで見せていただき、その後再度、社務所でお聞きした。

以上が八代神社の鏡の感想である。

この旅は、奈良時代の鏡の調査研究の旅であり、すぐには結果は出ないと思う。ただ、奈良時代の鏡を研究する上で大変重要であり、いま調査をしなければと思いついたからである。

今回「金谷一号墳の瑞雲双鸞八花鏡」をまとめる上で重要であることから八代神社の鏡について幸いにも八代神宮宮司寺田秀雄氏のご厚意により氏子総代 前田氏・藤原氏立会いのもとに実見できたものである。

八代神社の鏡は、国の重要文化財であり、これまでは本殿奥深くに秘蔵され、一般にも見る事ができないものであった。

古墳時代・奈良時代・平安時代の多くの鏡はいずれも重要な鏡であり、二時間余りの短時間であったが一面一面自分の手にもって直接観察をさせていただいて非常に迫力があり感動した。

これらについて私の鏡についての調査研究の一端がご理解いただければと思い紹介させていただいた。

※ 参考文献

・梅原末治「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」『史迹と美術』

二〇一号

・梅原末治「近時所見の本邦での唐式鏡」『古代学一卷三号』

・矢島恭介「志摩半島八代神社の鏡」『ミュージアム』二六号

・大西源一「志摩神島八代神社の古神寶」『国学院雑誌五六巻二巻』

・澄田正一「伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について」

原考古学研究所編『近畿古文化論攷』

・岡崎讓治「神門神社鏡とその同文様鏡について」

『大和文化研究』五巻九号

・亀井正道「志摩神島八代神社神寶の意義」

『石田博士頌寿記念史論叢』

・樋口隆康『古鏡』

明治維新の話

堀口 春夫

伏見鳥羽の戦いに幕府軍が敗れると、西国の諸藩は残らず朝廷の用命に従い藩兵を京へ出兵させた。朝廷も一時は満足したものの受け入れの態勢が出来ていなく、その軍勢の数に驚いて二月中旬には一旦国元へ帰して待機せよ、と命じた。兵力は出来てもそれを賄う軍費が無かったのである。また、元幕府の普代や親藩には信用がおけず、外様二十余藩を選定して出陣に備えた。まず軍費を集めるため諸藩に対して、一万石に付き三百五十両の軍費を出させた。これではまだ到底たらなかったが、とは言え幕府に時をかせがせては戦機を失すると、江戸城総攻めは装備の整った薩長土肥の雄藩を中心に二月中旬東海道を向けて進軍を開始した。大総督には有栖川熾仁親王を立て西郷隆盛が参謀となった。途中軍を三方に分けて東海道を中心に本隊とし、中仙道、北陸道に分けられ進軍した。が、その軍費が意外に量み、初めに三井、小野、島田等代表的高利貸の財閥に頼み三千両を用意させたが、これも焼石に水で大垣までにこれを使い果たしたと言う有様で、さらに三井組に一万両を借り受け、ようやく進軍が出た。

三月中には東海道の軍勢は六郷川まで迫ったが、勝海舟と西郷隆盛の談合により、兵を漸く休め、四月になって江戸城は無血

入城する事が出来た。將軍慶喜は上野寛永寺に一旦謹慎し、後に水戸に蟄居して一命をまぬがれた。しかし、幕府は七百万石の所領を没収されて十分の一の七十万石を駿遠の内にあたえられ、江戸立ち退きを命じられた。七十万石とは言え、それは名目だけで天領地であった外はこれから荒地を開拓して得るのであるからその困難はおして知るべきである。大部分の下級旗本は食禄を失ってしまったのである。これに憤激した血気盛んな幕臣は五月十五日、渋沢成一郎や榊原鎌吉等を頭に彰義隊を結成し、上野の山に立て籠ったが、官軍の大将大村益次郎の指揮する砲撃により一日にして壊滅した。捕らわれた


者はすべて首をはねられたと言う。一方、新選組の残党近藤勇等は、名を大久保大和と改名し甲府鎮撫総督武家参謀に任じられ、関八州の博徒や農兵を集めて甲府に向かったが、これもまた東三道を進撃してきた西園寺公望や板垣退助等西国兵の近代戦法に抗しきれず、途中で離散してしまいう始末であった。一方、東北

最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コーエカメラ

兵庫県山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089



では奥羽二十五藩が結束して官軍に抗する盟約を結び、また越後では長岡藩の河井継之助は良く善戦し、一時官軍を後退させたが、遂に弾丸に負傷し余儀なく後退し敗残の兵を率いて会津藩に合流せんとしたが途中戦死してしまった。また、日光に集結した幕軍の敗残兵も会津に合流しようとして途中官軍の攻撃に逢い、これもまた殲滅した。会津は特に頑強に抵抗して二ヶ月に渡って戦いぬいたが、次第に官軍に包囲網を狭められ、遂に力尽きて九月二十二日降伏し会津城は落城した。会津が降伏すると続いて奥羽の列藩は次ぎ次ぎと降伏して戊辰の戦争は一応終結した。

榎本武揚の率いる一部

幕府の海軍は、仙台より函館に向かい五稜郭に立て籠るが、これもやがて翌明治二年夏、黒田清隆等の官軍に攻められ殲滅する。そして慶応四年は九月下旬より明治と改元された。江戸は東京と改称される。天皇は十月に東京へ行幸され遷都をきめられるが、十二月にはまた一旦帰京され、明治二年二月、改めて東京に

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

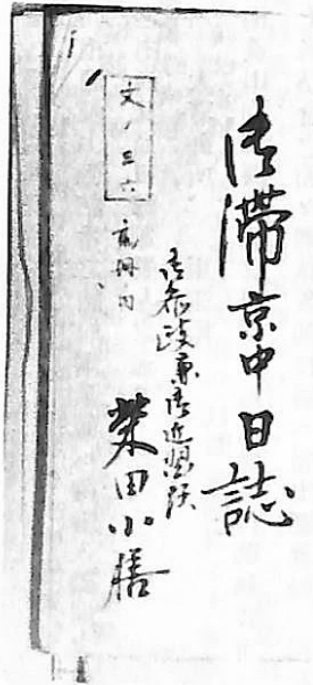
移られ遷都される。それ以来西京(京都)に帰られる事はなかった。諸藩の大名達は此の機をのがしては天顔を拝する事はおぼつかないと年末より続々と京都へ上京する。幕府が崩壊した以上、大名も今は幕臣では無く朝臣となったのであるから、明治二年の正月には参内して戦勝と新年の祝詞をのべねばならぬと山崎藩も藩主忠鄰が持病の潜癩だったため、若殿忠明を代理として上京させた。戦勝後は、もはや兵力は無用であったが、藩兵の一部を新政府に披露しよとてか、蛇勢隊一個小隊を供として上京した。当時の藩兵は三隊に分けられていて、上級武士で組織した蛇勢隊、中級武士で組織された積水隊、下級武士よりなる円石隊の三つの分団隊があった。蛇勢隊はすべて羅紗服を着せ、特に元込め式の新式銃を持たせて近代化した兵士であった。以下は其の時の記録があるので一部掲載する事にする。

明治元年十二月滞京日誌

明治元年十二月廿一日

滞京中日誌

文ノ三六
高岡日
幕府政事
近衛忠義
岸本小橋



明治元年十二月廿四日拂曉

御在所御発駕御道中無御滯

同廿七日申下刻極原駅へ着

御此処へ御用達、上柳治郎九為御出迎罷出候ニ付支度代金式朱御

目録金二百疋被下之御立之砌御目見被仰付初而遠方太儀と御意有

之候事、但し蛇勢隊長披露 同戌刻朱雀通於丹波屋御小憩是

ヨリ御提燈ニテ大宮通蛸薬師上ル御邸第へ御着但シ御届書ハ故有

リテ明廿八日御上着之伺ニ取計候事、尤御口書左之通り、今般

御帰輦之趣承知仕去ル廿四日在所表発足道中

無滞今廿八日上着仕候就ハ右乍恐奉伺

天機度奉存候宜御執成御差図奉願上候以上

十二月廿八 御名御花押

但シ奉書半切美濃折掛御直書之事、

右御書取公用人樽井八九郎御使者ニテ辨事所へ差出候事、尤廿八

日朝之取計也

同廿八日酉刻半刻辨事所ヨリ公用人御呼出ニテ左之御札御渡之事、

来ル廿九日参朝可致事、右ニ付明廿九日朝十字御参内被遊候旨

被仰出夫々申達ス 但シ御一新後萬事御省略ニ付御供廻リ随分

御減少被遊候旨被仰出着服之儀ハ御脇服沙麻上下御先割羽織小袴

餘ハ右ニ准候事、 同廿九日

一今日初御参朝ニ付御紋方木村筑後之介と申人御雇ニ付当役面会

之上於御居間御逢被遊御衣冠被上候、但右木村ハ公用人ヨリ前以

先へ御假館へ罷出御進退致候事、

一、天機御伺相適候上御詰番之諸候御筆頭へ御番入御伺之儀御頼ニ

相成候事之由尚又当日御廻勤左之通り

准后様、 大宮御所、 東園殿

右御廻勤相適申刻御機嫌能御帰邸被為在候ニ付御執政并ニ当役罷

出恐悦申上尚詰合之面々御執政御長屋へ罷出御欽帳ニ相記候事、

今日供左之通り

御道案内老人御先三人、御持鎗、御脇四人、

御供頭御刀番共御馬 御履持 御草り取、

御長柄、御両掛老荷、杏

捧、合羽籠、押式人

柴田小膳、若党、草り

取、馬、熨目上下、

右の通り御召連相成り尤

此度初而之儀ニ付御所内

案内遠見老人御履持 御

雇入ニ而餘ハ総手入ニ相

成候且又柴田小膳儀ハ別

段之思召ニ而御連被遊候

旨被仰出候ニ付御供ニ加

り候事、但シ御辨当ハ杉

折桜皮付菓子箱奉書包ニ



而差上候御供之面々へも弁当被下候事、

一、朝廷御一新之御龍裁ニ被為其萬事簡易質略と仰出之処別而此度御登京ニ付テハ御疲弊ヲ被為朕精ニ冗費御省被成度思召ニ付御台所仕込等ハ一切御連、不被成就テハ御三食御調羹等ハ総テ御小納戸ヨリ御手元ニテ御好ミ品致煮焼指上候様被仰出候得共甚心配之向ニ申立候ニ付吟味役ニ而暫取斗候様相成り末々ニ至迄右ニ准シ省略ヲ旨卜致候様被仰出且又御側向ハ御小納戸三人内武間源三御供限り兼御次三人御医師老人御台子兩人右之外表御供ハ老人も御連無シニ付御側使者ハ勿論表御使者等モ廻番ニ而相勤是又御玄関番モ無シニ付御次当直ノモノヨリ御取次相勤候様被仰出候、尤倉橋孫太郎、西村米次郎右兩人ハ當時為英式修業滞京罷在候ニ付御使者等差支其節ハ兩人へモ被仰付候様被仰出候事

元旦

元朝ニ付御雜煮餅被召上候其餘御祝儀鏡餅御蓬菜等総而御廃止之事朝十字御執政当役熨斗目麻上下着用御礼申上尤御近習向



ハ朝番之者上下着午後ヨリハ平服ト被仰出詰合之面々御礼無之、
一、明二日十二字御参内被仰出大横目へ申達夫々へモ申達候、尤年始ニ付御先服紗上下御脇熨目上下余者旧臘廿九日之通と仰出被候事、

一、兼而黒川丹後様へ申付有之候品々出来ニ付左之通御小納戸佐川武馬へ引渡候

御狩衣 沓領 御懸紐 沓掛

御小元結 三掛 同羽二重一寄 同断

御立烏帽子 沓沃 御扇子 沓握

御鎧直垂 沓領 御引立烏帽子 沓頭

御指貫 沓腰 御沓 沓足

正月二日

今日雨天に付御駕にて御参内被遊候、尤も五つ半御供揃被仰出候お供廻り旧冬廿九日の通り、御執政当役お見送り罷出候尤平服、但し、お供着服の義昨夜お回状にて仰出も有之候に付お供頭兩人押一人お履揃一人ハ三人は例の通りお雇に相成御所内御案内お雇は最早お止被成候事、

一、御衣紋方罷出る例之通り面会十一字御供揃被仰出十二字御参内、今朝木村筑後介と申仁罷出御衣冠上げ候に付当役應對いたし候、
一、同西の刻おきげん御本陣に入御今日御列座にて天顔被拜御料理御頂戴にてお帰邸、

一、明三日初御当番に付五つ時お供揃の義大横目申達候お小納戸お次同断、着服お供廻りは総て今日の通りと申達候、

一、細川中将様、嶋津淡路守様御相番筆頭に付御願御使者差出候、
倉橋孫太郎、西村米次郎之を勤む

細川様へ

春寒御座候所御堅勝被成御勤珍重御義奉存候将又今般御相番相
成候所至て不案内の義御座候間万端お心添被下候様仕度、右御
頼以使者申上候以上

正月 御取次 奥村鉄之助

嶋津様へ

春寒御座候へ共御堅勝被成御勤珍重存候、将又今般御相番相成
候所至て不案内の義万端御心添被下様致度、右御頼以使者申
達候、以上

正月 御取次 中嶋清三郎

一、稲垣对馬守様より御使者（御上書写）

御使者木本孫左エ門

春寒御座候へ共御堅固被成御勤珍重に存候将又今般御相番相成
候所至て不案内の義御座候間万端御心添被下様致し度右為御
頼以使者申達し候以上

一、御番左の通此方様には三の御番へ御加入

壹番

^{越前}松平少将 ^{明石}松平侍従 本庄宮内大輔

水野大炊頭 堀田出羽守 土万大和守

酒井直之助 本多修理 松浦豊太郎

貳番

井伊中将 黒田少将 牧野豊前守

谷 大膳亮 松平能登守 青木民部小輔

吉川芳之助 伊達錦之助 稲垣藤五郎

参番

細川中将 嶋津淡路守 京極飛彈守

^{山崎}此方様 桜井遠江守 稲垣对馬守

岡部弥次郎 前田多慶若 山崎寿丸

四番

高松小将 大津侍従 小笠原左エ門督

本多河内守 本庄伯耆守 内藤丹波守

平野内蔵介 朽木十太士

五番

^{津山}松平侍従 京極佐渡守 ^{三日月}森 对馬守

片桐主膳正 永井信濃守 池田但馬守

山名主水介 仙石鋭雄

○一月三日

一、今朝如例御衣紋付罷出候、辰刻御供揃い御参内被遊候所今日は
御酒御支度等御頂戴且つ御中啓壺握御拝領にて夕酉半刻御機嫌
克御帰館被為候、

一、今日山岸権内着京被致候右は少々御内用筋相談方俄に被迎に付
去臘二十九日御在所発程の由着の上それぞれ委細相談いたし候、
後目通りにて御用の次第被申上候、

○一月四日

一、今日有馬遠江守様（忠明御舎弟丸岡藩主）より御肴一折御使者を以て到来候右は御着京御歛且つ御滞京御見舞に被在候段申来候、

一、今日御相番様方へ御頼御使者差出候、倉橋孫太郎相勤候尤細川様へは一昨日御使者を差上候へ共尚又昨日初御当番済され候に付御挨拶の為別段御使者差出し倉橋孫太郎相勤め候、

一、山岸権内為御側使者三日月様へ被罷出候右は此度若殿様御上京の所至って御不案内の義、三日月様には当地の御勤振御案内の義に付御頼被成度且は

御隣藩の義に付是迄迎も御懇意にて御座候へ共、別て以来は御懇親を結ばれ度旨申述候、就て御菓子箱送られ候代金五百疋

一、御小納戸定加番岡橋一江へ申達御次定加番菅江運達へ申達す

○一月五日

一、今日年頭御祝詞左の方々へ御廻勤被遊候尤お供廻り御減少左の通り



一、若殿様御慰斗目御麻上下 御馬

一、御供頭割羽織袴 同馬

御刀番同断 同馬

右の外御遠見御案内老人、御道具壺本 御両掛一荷、宰領押兼老人御草履一人

但し雨天模様にて付御長柄御持相成候、

御廻勤御名前

徳大寺殿 中御門殿 鷹司殿

東園殿 久世殿 越前中納言殿

宇和嶋様 細川様 高松様

備前様 三日月様

右の通り御手札に御口上は認被成御差出被遊候

年始為御祝詞	雲上方	五枚
参上仕候	本多肥前守	同文言

一、今日三日月様より御側使者を以て昨日の御挨拶且御見舞為鶏卵一箱御到来相成候、右御廻勤御留守中に付御取次より御留守中の趣御答に及び御品物預り置候御使者深沢奈太郎、

一、戸田淡路守様より御着京御知せ御頼かた奉礼来る御返書御歛差出候、

一、御舎弟戸田銚五郎様へ御側使者として武間源三郎勤む、

一、本家岡崎様へ御着京御案内の為使者差出候、西村米次郎相勤む。御

取次より追て御案内も申上可候へ共近日平八郎様にも御上京被遊候段申聞候、

一、御親戚有馬様、植村様末だ御上京は御座なく候へ共公用人中迄御

案内奉礼差出候。(未完)

返り読み記号、送り仮名等々がないため読みにくいと思いますが、今会報にこの日誌の一部を掲載しましたのは、明治初年の藩公の動静を知る資料として御覧いただきたかったです。

以下次号へ

尼崎藩領庄屋文書

久保寅夫

定メ書一札之事

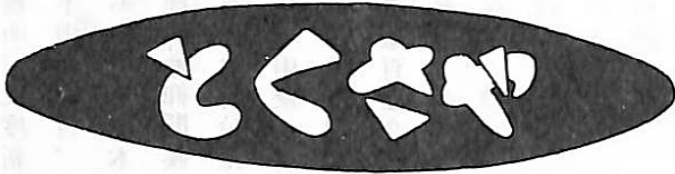
一、此度御上様より銭継被仰付候ニ付、村方一統相談之上、惣田流地之場所ヲ開作附仕候相談事仕候様付、依之植付方之義ハ村中一統立合ノ上ニ可仕候。然ル上ハ作植米ノ義ハ、時ノ村役人ニ預置其上借り引等ハ組頭ヲ請合ニ連、借請仕ル事ニ御座候。尤返済之儀ハ壹ケ年米壹割之積以利益加へ、元利米共毎年十月限ニ可仕候。若シ不足仕者出来候節ハ組内よ里相弁急度御返済可仕候。猶又村方家別割之儀ハ増減御座候とも、年々改家別を以割当り候様可仕候。多とへ新株とも無申分村方一統永順可仕候。尤追々多分ニ相成候時ハ金錢致置、一統相談之上儘成證文取之借附仕候。以後此儀ニ付相共ニ我儘成義ハ申聞敷候。為後日村方

一同ニ連印一札仍而如件。

嘉永六年丑四月

友藏	藤兵衛
甚七	甚七
梶藏	万右衛門
賀の	久藏
治右衛門	伊三郎
惣右衛門	以津
三郎兵衛	源右衛門
里	岩藏
婦き	志ゆん
その	弥兵衛
□ □	長藏
きぬ	平七
平七	忠兵衛
善右衛門	糸藏
辰之助	周藏
新左衛門	もせ
文四郎	市太郎
五郎左衛門	弥三右衛門
元藏	忠助
喜代藏	

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町(さつき通)
☎(0790)62-1680代

右之通相違無御座候依之惣連印與書印形如件

同	同	同	組頭
丑之助	忠藏	源左衛門	吟藏
Ⓜ	Ⓜ	Ⓜ	Ⓜ
□	同	同	組頭
店寺	伴治	鍵藏	久七
Ⓜ	Ⓜ	Ⓜ	Ⓜ

年寄 吉右衛門 Ⓜ
 庄屋
 安黒村
 五右衛門 Ⓜ

乍恐御訴訟

一、新規之畑田差留出入

松平遠江守殿領分

播州完栗郡

上町村

願人 年寄 甚 七

庄屋 藤兵衛

右庄屋年寄病氣致

善左衛門

百姓代

五左衛門

本多肥前守様御領分

同国同郡 □ □

上牧谷村

年寄

彦兵衛

相手 庄屋

勘太夫

右者相手 □ □ 上牧谷村字糸崎申所ニ、去申五月新畑田仕候所、
私村方ハ水末村ニテ下地御用水不自由ニ付、行届不申。度々ノ早

損および難渋仕在之候所、此度新畑田出来候テハ、私村方弥早損
および百姓等統相成不申候ニ付、右畑田相止呉候様右村役人中エ
度々掛合候得共聞入不申。無扨本多様御役所奉願候所、相手方早
々御召出御糺之上御理害被仰聞候得共聞入不申。我儘申年月引延
シ訳立不申、最早作方仕附時分差掛リ筋立不申、難渋至極ニ奉存
候。此上ハ下夕□相濟不申候ニ付無扨差出
奉御訴訟申上候。何卒右相方御召出御糺之上、右新畑田御差留被
為成 候ハバ、御慈悲難有仕合奉存候。以上

願人

善左衛門

五右衛門

天保八酉年

三月

御奉行様

追而 これは下書きと思われる。

山荒定書之事

一、近来林山猥り苧荒候ニ付此度と村惣寄会之上一同

取締之趣キ

右之通

一、鎌苧

銀三歩

一、鉦切り

同五歩

一、鎌切り

同拾歩

右之通林山江立入苧荒候者有之候へバ、知得テハ譬江女子供ニ
不寄、山主見付次第時之庄屋所へ被届ケ候節、御勘定帳之上ニテ
右相定之過料銀相渡可申候。其時違背之無旨一同納得定ニ御座候。
猶又其向草刈之節、林、めはゑ、実はゑ、茅場ハ木ノ目ハ勿論、
小茅至迄一切苧取捨テ何者有之ハ過料銀右同所、可仕事一同承知
之上村申連判仕候間、以後相共ニ堅相守可申候。為後日定書キ仍
而如件

天保八酉歳

三月

上町村

治右衛門 ㊤

源四郎 ㊤

梶藏 ㊤

源五郎 ㊤

市太郎 ㊤

重藏 ㊤

藩では大騒ぎになった筈である。安志藩は九州中津藩時代、藩主の行状がよくないということで八万石を四万石に減封され、その後も後つぎがなく廃絶になるところを祖先の功によって名跡料として、一万石で安志へ移封されたいきさつがあるので、此度の立ち退き事件は「穏便」にしておく必要があったのである。

藩士立ち退きの原因は確実な文書も、いい伝えもなく全く不明であるが、跡名相続などといったお家騒動でなかったことだけは確かである。

さて、安志藩士立ち退きを知らされた山崎藩も大騒ぎになったようである。常識的にみても、二十名もの武士団を取りおさえるということは尋常の方法で成功しないことは明らかである。山崎藩では早速とりおさえの為の体制がつけられた。甲冑をつけた騎馬の者二名に、外に士分の者十六名、足軽十五名、中間九名の計四十二名の一番隊と、同じく騎馬の者二名を筆頭に五十一名の者に二番隊として、出動の準備命令が出された。山崎藩としては大変な迷惑であったに違いない。

一方立ち退いた安志藩士たちの一日以後の足どりは不明であるが、山崎藩奉行に入った報告によれば「三日夜、御名村西光寺江右之面々罷越足溜之義相頼……」とあって、立ち退き藩士たちが西光寺へやってきたことが明らかになったが、寺ではいろいろ理由をつけて断わりの押問答をしているうちに夜明けになって、つぎつぎと退散してしまつたというのである。そして退散した後へ奉行から、立ち退き藩士たちに休息場や宿を借してはならぬというお

触れが届いたというのである。

山崎藩では早速この動きを安志藩へ知らせている。また西光寺に対しては、吟味中謹慎を命じ、一件落着した九日頃奉行所へ呼び出され、「叱り置く」ということで、とがめはなかったようである。それにしても西光寺さんも、とんだトバッチリをうけて迷惑なことであつた。また待機中の山崎藩士たちも出動することはなかつたようである。

さて、立ち退いた安志藩士たちは、二、三名の者を除き、七日頃までの間に、おいおい帰藩したということである。

二・出火時の人数の繰り出し

山崎藩の「覚」によれば、火災が発生したときは、お互いに人数を繰り出して助けあつていたようである。天明六（一七八六）年五月四日の安志藩家中・町方の大火のときは、山崎藩よりお見舞が賜られており、文化四（一八〇七）年の山崎出火に際しては、安志藩より人数が繰り出され、天保

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL⑥20036

二(一八三二)年八月四日、安志藩の御殿が焼けた時には、山崎藩が人数を繰り出すなど互いに助けあって消火につとめている。この記録以外にも事があれば相互扶助が行われたことであろう。

三・藩士の交流

藩内で藩士同士で婚姻するときは、藩への届出、時には許可が必要であったと思われるが、他藩者との婚姻は尚更難しかった筈であり、交通事情もよくなかった時代には、婚礼も大変であったと推測される。山崎藩の「分限帳」や兵庫県宍粟郡誌の伝えるところによれば、安志藩士原良助の弟、新五は天保四(一八三三)年九月廿七日、山崎藩士

武間庄助の養子となり、藩主本多忠隣・忠明侯に仕え、重用され、明治維新後も小参事等の職を歴任し名声をさせたとしている。

また、前述の安志藩士が立ち退いた時に御名村西光寺に立ち寄っているが、それは立ち退き藩士の一人、北村伝三郎の家内と西光寺の家内と親類であったので、その縁故

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

百神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)

TEL (0790) 62-7588
FAX (0790) 62-7589

により立ち寄ったのではないかと記されている。さらに、安志藩士でありながら山崎青蓮寺の門徒の者もあるなど、士分の者同志の間で婚姻が幅広く行われていたと思われる。

四・山崎藩主、安志通行時の道中作法

つぎに、山崎藩主が、安志通行時の作法についてふれておきたい。山崎藩主が参勤交代など、安志を通行する時には、安志藩主の菩提寺である法性寺前に駕を止めて、駕からおりて一服し、見送りに来ている安志藩の奉行に「御念入テ御大儀」とあいさつすることが道中作法として定められていた。見送りの奉行は出立に際して「随分御無事で」とあいさつすることが、きまり文句であった。

法性寺は安志藩主小笠原家の菩提寺で、氏守の開善寺、祈願所の光久寺と共に、信州松本、播州龍野、豊前中津と移封先に建立され、三か寺の中では法性寺が最も格も高く、山崎から安志への入口にもあったので、山崎藩主も通行時には駕をとめて敬意をあらわすことにしたのである。

最後に安志藩と南の林田藩との関わりは、林田藩内での百姓が騒動を起こした時、人数繰り出しの要請があり、安志藩士が松山あたりまで出動したことの記録があるが、山崎藩との関係よりは、大分薄かったようである。

山崎藩と安志藩は譜代同志という基本観念から、行政・経済・文化・人的交流など、幕藩時代から密接な関係にあったといえよう。

秋の旅行記

岸 本 正 理

和歌山は、私達にとって近いように見えて案外遠い所ではなからうか。

最近、近畿自動車道と阪和自動車道が直結され、堺―岸和田間を除いて、すべて高速道路で行けるようになった。それでも、山崎から三時間二十分かかっている。日曜日のこととトラック等仕事の車が大変少なく、スイスイと走ってもこれだけの時間を要しているのだ。だから、和歌山へ観光に行ったことがある人は、案外少ないにちがいない。

最初の見学は和歌山城だ。市内に入ると前方に小高い森が見えてきた。間もなくバスが右折すると、お城の堀に沿って柳の並木が風にそよいでいる。柳の木の間から小高い山の上にお城の天守閣の屋根が見える。その天守閣を取りかこんで、堂々とした石垣や白い塀が緑の木々に囲まれて、不規則な造形美を見せている。本丸は、昭和三十三年再建されたもので、内部は、床にリノリュームを敷き詰めた近代風のつくりである。いろいろの資料が展示してある部屋の見学をすまし、天守閣に上がると和歌山市が三六〇度望観できる。

和歌山城公園から本通りへ出る信号の手前に遮断機があり、ボ

タンを押すと遮断機が上がる仕組みになっている。ところが、遮断機を通り抜けると前方の信号が赤の時は、停車をすることになる。そうすると、バスは、下りた遮断機にひっかかるので、二メートル道路にはみだして停めなければならぬ。この点、和歌山市に改善してほしいと思った。

紀三井寺の門前にある「はやし」というお土産屋さんの二階で食事をとった。百五名の郷土研究会員が一度に食事の出来る大きな畳の部屋だった。階下も他の団体がひしめいており、お店の人は汗だくになって下足の整理をしていた。

本堂にお参りするには、二百三十段ほどの石段を登らなければならない。参拝の時間は昼食を入れて一時間だ。お参りする人は、そそくさと食事を済まし本堂へと急いだ。あきらめた人は、下のお店で買い物を楽しんだ。それでも、予定の一時に五分過ぎただけで出発できた。東の空は、うす墨を流したように曇って今にも降ってきそうだ。屋

表装全般

…古いものを大切に…

表具師

松本永春堂

山崎町鹿沢本通り
TEL. 62-0122

からどうなるだろうと心配だった。

粉河寺に到着した。バス三台がやっと停まれる小さな駐車場であった。雨がぼつりぼつりと降ってきたが、みんな傘を用意していたのでバスから降りると、たちまち色とりどりの傘の行列ができた。朱の橋を渡り山門をぬけ石畳の参道を進むと前方に豪壮な本堂がそびえたっている。その前面に横に長く、名勝粉河庭園がひろがる。崖地をたくみに利用してつくられており、本堂との調和が見事であった。雨はたいしたこともなくバスのところへ帰るまでにやんでいた。

粉河寺の参拝を済まし、根来寺に向かう。沿道は、秋の穫り入れを間近にひかえた黄金色の田園がひろがる。その畔道に真っ赤に燃えたつ彼岸花が群れをなして一列にのびる。そんな風景に目を楽しませてくれるうちに、十五分ほどで根来寺に着いた。バスの中から大きな堂々とした山門が見えた。バスの中では、大きな歓声があがった。そこでバ

HOME CENTER アグロ

山崎店	粟粟郡山崎町今宿129番地 ☎0790-62-2434(代)
龍野店	龍野市龍野町富永字田井屋畑1005-64番地 ☎0791-63-3226(代)
上郡店	赤穂郡上郡町山野里字南行波2398番地 ☎07915-2-0703(代)
太子店	揖保郡太子町老原市川原39番地 ☎0792-76-0018(代)
佐用店	佐用郡佐用町円応寺86番地 ☎0790-82-2001(代)

営業時間/9:30~19:00定休日/毎週火曜日

スを降りるのかと思ったら駐車場は、そこからバスがうねうねと

した細い坂道を五分ばかり登ったところにあった。何と広い境内であろうか。解説書によると約一九万平方メートルの寺域だという。添乗員の谷林さんの案内で中に入る。見上げる大塔の堂々とした偉容、高さ三七・三メートルの建築物は、見学者を圧倒した。次に、本坊の方に回った。見事な池泉式庭園を見学した。山を背負って丸く刈り込まれたつつじが大きなおわんを伏せたようにぼこぼここと群がって植わっており、岩かげに水蓮を浮かべた池を前にして静まりかえっている。五月の花の最盛期にはさぞ美しいだろうと思った。雨はすっかりあがって晴れ間も出てきた。

今回の郷土研究会秋の研修旅行は、山崎を朝七時三十分に出て、山崎へ帰ったのが午後七時四十分で十二時間十分の日帰り旅行であったが、見学箇所は、初めに計画した通り、どこも比較的ゆっくりと見学が出来、十分楽しませて頂いた有意義な旅行であった。

閻斎神社に楷の木植樹

岡山の閑谷学校の孔子廟の前に紅葉のとても美しい大木があります。それが「孔子の木」といわれる「楷の木」だそうです。江戸時代、孔子のはじめた儒学の大先生であった京都の山崎閻斎の祖父が山崎に住んだことを誇りとして、鹿沢の閻斎屋敷と伝えられた地に昭和のはじめ閻斎神社が祀られました。

平成四年冬、姫路を中心に儒学の研究をしておられるグループが、闇齋神社に「楷の木」を記念植樹して下さいました。くわしい説明は後日、会員の方にお問い合わせすることにして、碑文の一部を紹介しておきます。

「この樹は儒学の祖師「孔子」の廟（中国山東省曲阜）にある楷の木の種子を曾ての会津藩校日新館によって育成され、闇齋神社へ贈られたものです。」

「儒学者として名声高く会津藩はじめ幾多の藩に招かれて師となり、多くの門人を育てた山崎闇齋も楷の木に学祖師を偲び、その遺徳に多くのことを学んだことと思われれます。」

『瑞雲双鸞八花鏡』を出版

会 報 部

山崎町金谷にある古墳、金谷一号墳から大正時代に出土した鏡については、東京国立博物館に所蔵されていることは知られていました。このたび、郷土研究会員である片山昭悟さんが現物を発見し、国内の同型の鏡との対比をレポートにした研究資料を発刊されました。

タイトルは『瑞雲双鸞八花鏡』で二冊からなり、一冊は金谷出土の鏡を中心として構成されており、B5版45ページであり、もう一冊は同型鏡の全国版というべきものでB5版51ページからな

っています。

金谷の鏡と同一の奈良時代の鏡を追って、奈良・大津・長野（岡谷）・宮崎（南郷村）・千葉・三重等々文字どおり全国を駆けまわって入手された写真、図版が盛り込まれています。

巖石神社の夫婦ヒノキが

町指定天然記念物になる

会 報 部

山崎町下町の町スポーツセンター南東側に「権現さん」と通称されている巖石神社があります。文字どおり岩石がそり立つところに本殿が位置し、その左手に今回指定になった夫婦ヒノキがあります。

根周り六・五m、目通り四・三m、樹高四〇m、指定樹齢約二五〇年で根元から九mのところまで二本に分かれ、巨岩を背後に、まっすぐ伸びた樹形は極めて美しく威厳に満ちています。現在もなお樹勢は旺盛で県下でも第一級の巨木です。

なお、ヒノキは山崎町の町木に指定されており、町を代表する巨木として後世に保存されることとなりました。

平成五年・六年度

役

員

役職名	氏名	住所	電話
名誉会長	安井淳三		
顧問	小畑欽之助		
"	庄和夫		
"	壺阪寿		
"	伊藤親保		
"	前田連		
"	福山清一		
会長	堀口春夫		
副会長	久保寅夫		
副会長	志水美好		
総務部長	柳田弘		
会報部長	大谷司郎		
研修部長	垣口正信		
史跡部長	志水正信		
事務局長	岸本正理		

役職名	氏名	住所	電話
山崎地区 西支部長	高野薫		
山崎地区 東支部長	尾上英夫		
城下地区 支部長	西村清		
戸原地区 支部長	志水正信		
河東地区 支部長			
神野地区 支部長	上野一人		
葛沢地区 支部長	久保寅夫		
菅野地区 支部長			
土万地区 支部長	高畑義一		
監事	志水武雄		
"	谷川道一		
山崎地区 支部長	伊野孫治		

平成五年度・六年度 各部構成

※支部長は全員総務部

史跡部長 志水正信					研修部長 垣口正信					会報部長 大谷司郎										
伊藤一郎		柳田弘			伊野操治	志水正信	大上善示	横井時成	年綱束	岸本正理			高野薫	垣口正信		河本雅視	安井道夫	藤村清一	谷川道一	織金義雄

仁尾永

横須	上寺	大才町	旭町	鴻ノ町	富士野	出水町	伊沢町	紺屋町	寺町	北魚町	福原町	山田町	元山崎	本町東	本町西	加生	門前	西町					
下宇原	宇原	川戸	比地	金谷	段	春安	鶴木	中井	船野元	御本屋	千本屋	西鹿沢	本鹿沢	中鹿沢	東鹿沢	山田	今宿	中広瀬	庄能				
	塩山	大沢	高下	塩田	青木	市場	大谷	上ノ上	上ノ下	中野	東下野	大上野	宇下野	与位	五十波	田津	三津	野田	岸田	三神	中	高所	出須石賀

平成五年・六年度 地区別幹事

株式会社
安井書店

去栗郡山崎町山崎90
TEL山崎②0700(代)

事務局だより

一、前事務局長安井清介氏が病死されたあと、二年と半年程事務局を受け持たせてもらいましたが、この度、家庭の事情により退き、新しく岸本正理氏に担当して頂くことになりました。

この間、至らぬ身で皆様にご迷惑ばかりおかけしましたのに、温かいご指導や、ご協力を賜り本当に有難うございました。心から厚く御礼申し上げます。
(柳田 弘)

二、手許の記録では、昭和四十三年九月に郷土研究会が京都へ旅行されています。それから二十五年も続いている旅行ですが、諸々の理由により、業者(神姫観光)に委託し継続することになりました。申込金等今までと変わるところがありますので、旅行案内をよくご覧になって、今まで通り大勢ご参加ください。

三、会費No.81配布と同時に本年度会費一、〇〇〇円を地区幹事さんで集金して頂くようお願いいたします。

(山崎町郷土研究会事務局)

山崎町

岸本正理宅